

遺跡ベースの人材育成と公共考古学—はじめに

西村昌也（金沢大学・国際文化資源学センター・客員研究員）

1. はじめに

2010年に、ベトナムでは、タンロン遺跡中心部の一部が世界遺産に指定された。喜ばしいことであるが、指定範囲のみがタンロン遺跡ではない。指定範囲に数倍する規模でタンロン遺跡は地中下に存在するはずなのだが、指定範囲以外では、事前調査や試掘による確認もなされずに、首都の大型建設プロジェクトが進行している。世界史的にも非常に大事であったと思われる、タンロン遺跡南端に位置した南郊壇遺跡も、緊急調査は行われたが、その内容が完全に解明されないまま、結局は保護にいたらず、地上から消え、大型ビル（Vincom Tower）が建ってしまった。21世紀のタンロン遺跡研究には、将来嘆いても取り返しのつかない部分が生まれつつあることはきちんと認識しておくべきだ。

もちろん、この原因はいろいろあろうが、第一義的には考古学者にある。遺跡を正確に理解し、それを説明するというのに、まだまだ成功していないのである。こうしたやるせない気分は、筆者をある方向に向かわせた。それは、ベトナムでの考古学者の人材育成と市民ベースでの公共考古学活動である。

人材なくしては、正確な調査もできないし、その正確な情報発信もできない。また、情報を発信するにも、論文にもとづく研究還元では、一般市民にはわかりにくいのは当然である。そこで、遺跡ベースのフィールドスクールや遺跡ベースの博物館などを2005年前後からプロジェクトを構想するようになった。ただ、こうしたプロジェクトは、多方面の理解とある程度の資金根拠がないと行えない。筆者はNPO法人東南アジア埋蔵文化財保護基金を設立して、経済界、学界、さらには財団の助成を仰ぎながら行ってきた。勿論資金繰りには苦勞もした。正直言って、論文執筆のために研究を行う作業とは、全く別種の労力やエネルギーが必要であった。しかし、世の中には、我々のような一見、“螻蛄の斧”的なことに興味を持ってくれたり、支援してくれたりする人がいるのである。そして、苦勞

に見合う成果を得たときや参加者から感謝の言葉を述べてもらった時には、苦勞も報われたと思った。キムラン陶磁器・歴史資料館を開館させた時には、妻でもあり同業者でもある西野範子と、10年以上に亘るキムランでの活動に思いを巡らせて、しばし感無量の感に浸った。近年、フィールドスクールなどの実習授業、さらには社会還元的プロジェクトが盛んであるが、大事なことは資金ではない、組織者の情熱である。情熱なきところにアイデアは生まれにくいし、よい結果も訪れない。我々がベトナムで学んだことである。